

＜白い季節＞の到来です。写真展の開催、クリスマスコンサートと美術館は冬の行事が目白押しです。ぜひお出かけください。

展覧会のお知らせ

常設展示

「小川原脩記念美術館開館 15 周年記念 自伝風な展覧会—私の歩いてきた道」

小川原脩を代表する作品で、本年度の新収蔵品『群れ』（1977 年）を展示いたします。

会期：平成 27 年 4 月 20 日（月）まで

企画展示

「渡辺洋一写真展—後方羊蹄山を滑る」

倶知安を拠点に創作活動を行い、国内外に“ニセコ”の魅力を発信しつづけているスキー写真家、渡辺洋一さんの作品を紹介いたします。

会期：平成 27 年 1 月 12 日（月・祝）まで
関連イベント：

■ギャラリー・ツアー（作家による作品解説）

日時：12 月 6 日（土）14 時

会場：展示室内 料金：要観覧料

■アーティスト・トーク

（創作秘話などを作家本人にお聞きします）

日時：12 月 20 日（土）14 時

会場：美術館映像ルーム 聴講無料

いずれも 講師：渡辺 洋一 氏（本展作家・写真家）

クリスマスキッズコンサート

ハンドベル、ピアノ、合唱…子どもたちが聖夜に贈るコンサートです。

日時：12 月 23 日（火・祝）

17 時 30 分～

会場：展示室内 料金：無料



ミュージアム通信

小川原脩記念美術館

☎ 21-4141 FAX 21-4142

URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/

倶知安風土館

☎ 22-6631 FAX 22-6632

URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/kucchan-huudokan/

開館時間は 9 時～ 17 時

（入館は 16 時 30 分）

12 月の休館日

2, 9, 16, 24, 30 ～ 1 月 3 日

木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

開館 20 周年

木田金次郎 アトリエからの再発見

会期：開催中

平成 27 年 3 月 29 日（日）まで

平成の「生まれ出づる悩み」2014

会期：開催中 12 月 7 日（日）まで

どんぞ忌 12 月 14 日（日）17 時

西村計雄記念美術館 ☎ 0135-72-2525

開館 15 周年記念展

「西村計雄美術館 15 年のあゆみ」

会期：開催中

平成 27 年 2 月 22 日（日）まで

トライアート「編集者」に挑戦！

日時：12 月 6 日（土）要申込

有島記念館 ☎ 0135-44-3245

「荒川好夫写真展『北海道 冬』

～蒸気機関車 C 62 栄光の記録～」

会期：開催中平成 27 年 2 月 22 日（日）まで

海と山と田園と —ミュージアムロード情報—

町長室から

早いもので、今年もあと 1 カ月で終わろうとしています。この 1 年を振り返り、月日が経つのは早いと感じるとともに、充実した 1 年であったと感じております。皆さまにおかれましては、どのような 1 年をお過ごしになられたでしょうか。

さて、11 月に行われた町の総合文化祭では、数多くの個人・団体が歌、踊り、演奏や絵画、書道などの文化活動を披露してくださいました。どれも素晴らしい作品や発表ばかりで、ご覧になられた方を楽しませてくれました。文化活動が大いに盛り上がったことは大変喜ばしいことです。これも、文化協会をはじめ、日頃より文化活動に勤しんでこられた方々の努力のたまものであると感じております。

12 月に入り、いよいよ倶知安町にも本格的な冬が到来します。降雪により見通しが悪くなり、路面も滑りやすくなるなど、冬季はさまざまな危険があります。特に車の運転時は注意が必要です。スリップや視界不良といった、いわゆる冬型事故にはくれぐれもご注意ください。また、年の瀬を迎えてお酒を楽しまれる機会も多くなると思います。管内では、7 月に飲酒運転によって不幸にも 3 名の方が亡くなる事故が発生しました。「飲酒運転は絶対にしない、させない」を合言葉に、楽しくお過ごしいただきたいと思っています。学校も冬休みに入り、ご家族で外出する機会も増えることと思います。健康管理には十分に気を付けられ、晴れやかな気持ちで新年をお迎えください。

福島世二

感動一点 の場

『無題』

1981年 小川原 脩 画

小川原が旅したチベットの中心都市ラサの印象を描いた作品で、大地に腰をおろした母子の様子を、チベットの主要な家畜であるヤクとその土地ならではの形をした家屋を背景にして描いている。リズムよく配置された建物、ヤク、そして母子の姿が画面に奥行きを与え、広がりある大地を連想させる。3頭のヤクが奥から、正面、右、左と気ままな方向を向いているところが、どこか楽しさを感じさせる。

小川原本人は、代表作『チベット讃歌』（1982年）に登場する、この作品によく似た母子の姿について「私はなんにもチベットの聖母子像を描こうと思ったわけではないが、ラサの真ん中で家畜達に取り囲まれ、乳房をふくませている母子の大きさや心ひかれたのだ」と述べている。

母の頭に巻かれた緑の布と子の赤い衣装の明るい色彩が印象的な母子像、聖夜が近づくこの季節にご紹介することにした。



ふる探訪
さと

381回

—文化のすがた—

敬愛する年長の友人がいる。今は帰化植物の研究に余念が無いが、彼の本来の姿は東京と金沢で修行を積んだ庭師である。金沢時代に師匠から言われたという。腕の良い庭師になりたければ、まず良い日本建築や庭園を見よ。博物館で国宝級のやきものや掛け軸を見よ。お茶を学べと。

多くの同僚がそれをしない中で、彼は庭園や博物館巡りを何年も重ねたらしい。その中で、さまざまな構造や造形が持つ意味への理解が深まり、次第に建築や庭園の様式の移り変わりの背景までも理解するようになったという。

その彼が言う。独自の様式や形式が完成されるのに100年ではムリで、どうも120年から130年という時の蓄積が必要らしい。しかし面白いのは、ひとたびそのきざしが出始めたら、その後は次々と変化が現れ、短時間で完成に向かう。どうも、そのような一般的な傾向があるようだ。

重ねて彼が言うのだ。北海道独自の文化、もっと具体的に言えば、北海道独自の様式美が出るの

はもうすぐだと。北海道の各地域が100年以上にわたって蓄積してきたものが、これから独自の様式を生み出すはずで、そのきざしはここ10年ぐらいの中に出てくるだろう。自分はそれを見ることができると思うと、今からわくわくしている、と。

文化と聞くと、美術館や博物館にしまい込んであるように思いがちだが、強いて言えばその本体は、社会の基礎に深く根を張っている考え方や捉え方の根本のようなものだと思う。だから生活の仕方から様式美までさまざまに姿を表すわけで、その一端が様式美に表れるとき、別の面にも表われても全くおかしくない。さて、どんなきざしが北海道に、そして倶知安に現れるのだろうか。文化の華が開くのを目の当たりにできることを思うと、やっぱりわくわくしてしまう。

（倶知安風土館 館長 岡崎 毅）